

秀 賞



夢は目標となり、向上心を生む

山形県戸沢村立戸沢中学校

二年 池 田 麟太郎

今年、中学校二年生になって、ようやく身長が百五十センチを超えた。しかし、体重は未だ四十キロに満たず。同じ年の男子と並ぶと、頭半分くらい小さく、腕も足も細い。今年一年間でグーン！と二十センチくらい伸びたらいいなあと思つて勝手な予定を立てている。

そんな小さな僕だが、部活動で野球をやっている。ポジションはピッチャー。右投げの左右両打ち。ユニホームを着てグラウンドに立つと、小学生にしか見えないとよく言われている。

野球との出会いは、小学校三年生の時。地元のスポート少年団の野球チームに入団して、それからずっと続けている。少しずつ野球の楽しさが分かってきて、いつの間にか夢中になっていて、今では野球が大好きになった。どんなに辛い練習があつても、どんなに暑い真夏の練習であつても、もう野球をやめたいと思つたことは一度もない。勉強は嫌いなのに、どうして野球はこんなに大好きなんだろうとよく思う。ボールを手にし、バットを振り、毎日、自然と野球をしているが、そうさせる野球の魅力とは何なのだろうか？ 今ははっきり見えずにぼんやりしているが、野球には僕の夢があるような気がする。

「池田君、地区選抜選考に合格だよ！」

と、部活動顧問の先生から一本の電話があつた。「よっしゃー！」心の中でそう叫び、嬉しくて嬉しくて、喜びが体中を駆け巡つた。地区内には九つのチームがあるが、その中の二年生から二十名を選抜し、地区選抜チームを結成するというもの。選考会には三十名以上が参加していた。その中から僕は選抜メンバーに選ばれたのだ。

喜びもつかの間。父にこう言われた。

「麟太郎が選ばれたのは、スタツプからの先行投資なんじゃない？ 実力で見たら他のメンバーとの差は歴然。試合に出られるようになるのは、まだまだ先の話。これからの頑張り次第じゃないの！」と。自分も納得し、気合を入れ直した。

夏の甲子園では、高校球児が熱い試合を繰り広げている中、僕は、選抜チーム初めての練習日を迎えた。

「いくぞー!! へーい!!」

「今のナイスプレー!!」

「惜しい、惜しい、ドンマイ!!」

みんなが、大きな声を掛け合い、それが球場全体にこだまし、お祭り騒ぎのようにワイワイした雰囲気での練習。自分はその雰囲気圧倒されながらも、少しずつ、自分の気持ちも高まって、プレーにも力が入っていく。プレーでミスがあると、監督やコーチよりも先に、チームメイトからの檄げきがとぶ。

「今のはもつと前に突つ込んで捕ろうぜ!!」良いプレーをすると、仲間からの絶賛の声がとびかう。

「いいぞー!! ナイスプレー!!」

切磋琢磨とは、こういうことをいうのかと初めて感じた。この初日の練習だけで、僕にとって大きな刺激となった。こんな仲間と、自分も一緒に野球ができることを嬉しく思った。

練習を終えて帰宅すると、テレビでは夏の甲子園

大会準々決勝が中継されていた。一点を争う接戦で延長にもつれ込む試合もあつた。「勝ちたい」という意地と意地のぶつかり合い。緊迫した場面できつちりヒットを打つ姿や、必死に守り抜こうと難しい内野ゴロやヒット性の打球に食らいついてキャッチするファインプレーなど、ガッツあるプレーに僕は感動し、興奮した。それと同時に僕は思った。今までぼんやりしてハッキリしなかつたものが見えてきた、と。

僕も、高校野球のグラウンドで輝きたい！ 自分も選抜に選ばれて新しい活躍の場を得た時に、大会中の甲子園で活躍する高校野球児たちの姿を見て、僕は自分の夢を見つけた。決して強くななくてもいい、うまくなくてもいい。甲子園で活躍する高校生のように、観ている人の心を沸かせるようなガッツあるプレーができる野球選手になりたい。

僕は、これからの部活動や選抜チームでの野球で、挑戦する気持ちを全面に出してやってみようと思う。練習を重ねて、それが自信になれば自分もいいプレーができるはず。まずは目標を立てよう。そして、その目標が達成できるように努力しよう。

今日も僕は、枕元にグローブとバットを置いて眠りにつく。高校でも野球で輝く自分が居る夢を見ながら。また明日も大好きな野球をしよう。